

和歌

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける

山部赤人

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子

大伴家持

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

額田王

淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ

柿本人麻呂

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

紀貫之

山里は冬ぞさびしさまざりける人目も草もかれぬと思へば

源宗于

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

西行

心なき身にもあはれは知られけり嶋たつ沢の秋の夕暮れ

西行

面影のかすめる月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に

藤原俊成の女

短歌

いちはずの花咲きいでゝ我が目には今年ばかりの春行かんとす

正岡子規

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

島木赤彦

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

若山牧水

牛飼が歌よむ時に世の中の新しき歌大いに起る

伊藤左千夫

牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ

木下利玄